

都の雁がね : 文苑

著者	櫻月子
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 6
ページ	4 7 - 4 8
発行年	1894-05-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4392

しれたるもの
けりいづれも
ののに弄はれ
なるべし皆そ
し蔡の處筆力
見る

をみだして月
る暗に反應を
筆致輕妙

方なる、官人をも、常のいかめしきにも似ず、あやしもの、ともど、わりなく、蹴る、いづれも、杯中のものに、弄ばれし、あるべし。花に清めんの思も、今はあかく、煩はしくありぬ。道にてすらかゝり、花の下は、いふもさらあるべし。これよりは、心の友と物語せん外に、心を慰むる術はあらじ。とて路を轉じて、さる親しき人の許を訪ひ行きて、燈剪て、夜更くるまで、しめやかに語らひつゝ、歸路に出づれば、十九日の月は、早や立ちのぼり、その光いとのどかに、うちながむるも、おのづからすが、いくなりぬ。

文の題さへに事うはりてれもしろきに行文の精采あり變化あるまたこよあし

四月十六日

稼 堂 批

都の雁がね

櫻 月 子

吹すさふ

風に乱るゝ蘭菊の

匂ひとめて引結ぶ

嵯峨野の奥のゑをり戸を

てらす、眞如の月影を

友どあがめて小男鹿の

其音よむせふ折もあり

まかはあれども何時かまた

文 苑

馴るれば此處も住吉の

まつとしもなく吹く風に

心をすまの秋立ちて

天とふ雁の二ツ三ツ

たが玉章や傳ふらむ

流石昔の忍ばせて

思ひ乱るゝ折しもあれ

どの面の落葉さらくど

音してわたるものやそも

四十七

梢をつたふ樹枯か

さては妻こふ小男鹿の

重ねく に打亂る

心の駒の聲たろく

轡の音も聞ゆあり

あはれ人あき山里に

駒打入るゝ人やたれ

いふかり乍ら玄をり戸を

あけて誰ぞとおどあへば

思ふべしやは思ひきや

なさけも深き我君の

露の玉章傳ふめる

都の空の雁がねやこれ。

鶯花契萬春

野尻 狂介

萬代の春もかはらしさく花を

たどりていはふ鶯の聲

咲きにはふ花の林に鶯の

萬代いのる聲のきこゆる

遠山霞

むらさえに残る白雪さむたれは

夜 雨

霞の衣今日は着にけむ

春といへど淋しさいとゝまさりけり

小雨ふる夜の旅の枕は

雨後新樹 氷 川

をしまれし花のなこりにひきかへて

雨に色ろふ若葉をそ見る

蛙

櫻花ちりて流るゝ谷川の

このもかのもとに蛙あくなり

欸 冬

春雨の露に色香もまさりつゝ

匂ふま垣のやまふきの花

友 情

としふとも變らぬ人の心ころ

むすふまことの道の友垣

風前落花 硯友會員 受樂院義春

吹まゝにこするはなれて春風の

行衛見せてもちる櫻かき

春曉月

はのくくと白み初る山の端に